

狛江古墳群 II

平成 10 年 3 月 20 日発行
狛江市和泉本町 1-1-5
電話 (3430) 1111

IV 狛江古墳群の造営過程

これまでの調査の成果と、これによって明らかにされた特徴をもとに、さらに各古墳について考えてみると、以下のような古墳群の造営過程を想定することができました。

狛江古墳群は、短期間に多くの古墳が並行して造営（120年程の間に70基前後の古墳が造営されたと思われる）されたもので、単純な一列の古墳群ととらえることはできませんでした。そこで前に述べた、岩戸・和泉・猪方の3支群に分けて検討したところ、各支群ごとにやや大型の円墳を核にして、相互に拮抗するかたちで造営されていたらしいことがわかってきました。このような古墳のなかで現在知られている最も古いものは、和泉支群の弁財天池1号墳です。5世紀前半の築造と考えられるこの古墳と、時期的に並行関係にある古墳は、現在まだみつかりません。5世紀中頃になると、岩戸支群にも古屋敷塚古墳が出現します。この時期の和泉支群の古墳としては駄倉塚古墳が挙げられますが、白井塚古墳もこの時期に相当する可能性があります。5世紀後半には、猪方支群でも（仮称）東和泉8号墳が築造されるようになり、いよいよ3つの支群で並行して古墳の築造が行われることとなります。この時期に対応するのが、和泉支群では経塚古墳・東塚古墳、岩戸支群では橋北塚古墳であろうと思われます。

5世紀末から6世紀初頭になると、猪方支群に帆立貝形古墳である亀塚古墳が登場します。この古墳は（仮称）東和泉2号墳・4号墳・6号墳等の小型円墳を、陪塚（有力な大型古墳に近接して従属する小型古墳）的に伴っている可能性が考えられます。この時期の和泉支群の古墳としては、松原東稲荷塚古墳が想定されますが、岩戸支群では該当する古墳はまだみつかりません。6世紀前半の古墳と考えられるのは、和泉支群では絹山塚古墳、岩戸支群ではこの時期もまた該当する古墳はみつかりません、猪方支群では前原塚古墳が挙げられますが、特に猪方支群では、全長40mを誇る亀塚古墳から直径23.5mの前原塚古墳へと、一転して規模を縮小するようです。狛江古墳群の最終段階と考えられる6世紀中頃の古墳としては、和泉支群では兜塚古墳、岩戸支群では土屋塚古墳が想定されますが、猪方支群には該当する古墳が認められません（久保前原古墳等の小型円墳が該当する可能性はあるが詳細は不明）。

以上のように3つの支群に分けて、古墳群の造営過程を想定しましたが、さらに各支群を比べてみると、猪方支群では、5世紀末から6世紀初頭の亀塚古墳の段階に、岩戸支群では、5世紀中頃の古屋敷塚古墳の段階に、それぞれ大きな盛行の時期（3支群中最大級の古墳を輩出する時期）はあったものの、各時期を通して一程度の勢力を堅持していたのは、和泉支群だったことがわかりました。しかも和泉支群は、狛江古墳群中最古の弁財天池1号墳を伴い、これも古墳群中最古と考えられる円筒埴輪片が出土した駄倉塚古墳・東塚古墳を伴い、加えて狛江古墳群に先行する4世紀代の方形周溝墓（周囲を方形に溝で区画した弥生時代から古墳時代の有力者の墳墓）が検出されていることからしても、狛江古墳群の主流に相当する位置を占めていたものと考えてよいでしょう。

V 狛江古墳群の被葬者

これまで狛江古墳群の調査成果と、そこから明らかにされた特徴と造営過程についてみてきましたが、最後に狛江古墳群の被葬者（埋葬された人物）について考えてみましょう。

この問題を考えるとき避けて通れないのが亀塚古墳の存在です。亀塚古墳は狛江古墳群中でも数少ない、埋葬施設を含めた内容の明らかな古墳で、出土した副葬品の特徴から、かつてその被葬者を渡来人とする学説が出された古墳でもあります。この学説については、亀塚古墳の築造時期が、『日本書紀』の記述から一般に渡来人が東国に移住したといわれる666年より150年以上も前であること、同古墳の副葬品は近年の調査成果からみると畿内有力古墳のものにちかいことなどから、その可能性は低くなりました。しかし、狛江古墳群中屈指の墳丘規模を誇り、唯一の帆立貝形古墳でもある亀塚古墳の被葬者は、多摩川中流域に君臨した首長クラスの人物であったものと考えられます。また、亀塚古墳とほぼ同等の墳丘規模と

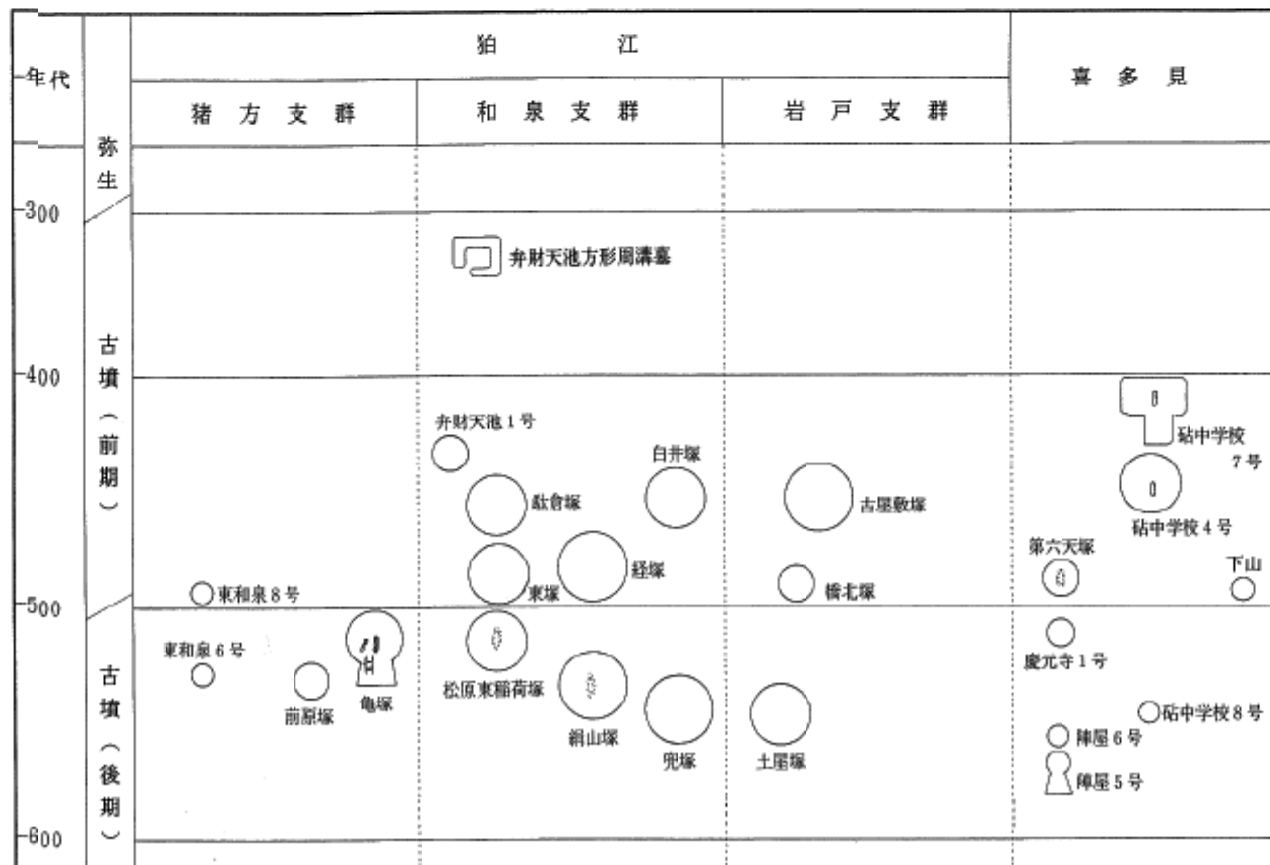
推定される、狛江古墳群中の直径40m前後の円墳（古屋敷塚古墳・経塚古墳・絹山塚古墳・兜塚古墳）の被葬者についても、その可能性が高いと思われます。そして、亀塚古墳を含めたこれらの古墳を、狛江古墳群の造営期間にあてはめると、20数年ごとに一基ずつ築造されていった首長墳の系列を想定することができます。

このような想定は、狛江古墳群が造営されていた時期の多摩川中流域において、狛江古墳群の最大級の古墳（直径40m前後の円墳）に匹敵するほどの規模の古墳が他の古墳群に全く認められないことから、的確なものと考えられます（狛江古墳群から比較的近い距離にある喜多見古墳群に所在する、世田谷区砧中学校7号墳が4世紀末から5世紀初頭までは、多摩川中流域で最大の古墳であったが、5世紀中頃になると、喜多見古墳群の円墳は直径30m以下になります。また、調布市・府中市・多摩市等に若干認められる同時期の古墳も全て直径25m以下のものです）。

一方、前にも述べたように、狛江古墳群は、一般的な群集墳に先行して造営された軍事的性格をもつ墓制といわれている初期群集墳で、5世紀前半頃に突然出現し、かなり短期間に多くの円墳が並行して造営されたという特徴があることや、畿内直輸入品と思われる亀塚古墳の副葬品の豪華さから、畿内政権と直接結びつきをもつ軍事集団の古墳群とする学説も提示されています。この学説は、亀塚古墳出土の100本以上の鉄鎌と馬具等や、絹山塚古墳・松原東稲荷塚古墳・弁財天池1号墳出土の鉄製武器類の存在からも妥当性の高い学説といえるでしょう。

これらの事項をまとめると、狛江古墳群の被葬者は、もともとは在地の一有力者でありながら、畿内政権と直接結びつきをもつことにより、多摩川中流域の最初の首長墳である前方後方墳の砧中学校7号墳のあとをうけて、約100年以上の間、同地域のムラムラを統括してきた首長たちと、そのもとに結集した軍事集団の構成員たちだったと考えることができますでしょう。

このように、狛江古墳群の被葬者についても、やや漠然とはありますが、まとめてみました。しかし、前述した古墳群の造営過程もふくめて、実際にはまだ不明な部分の方が圧倒的に多いのが現状です。これらを明らかにするためには、今後の調査・研究の進展が不可欠です。



多摩川中流域古墳年表